

第8回

in 山口

子ども・子育て支援 全国研究大会 2017

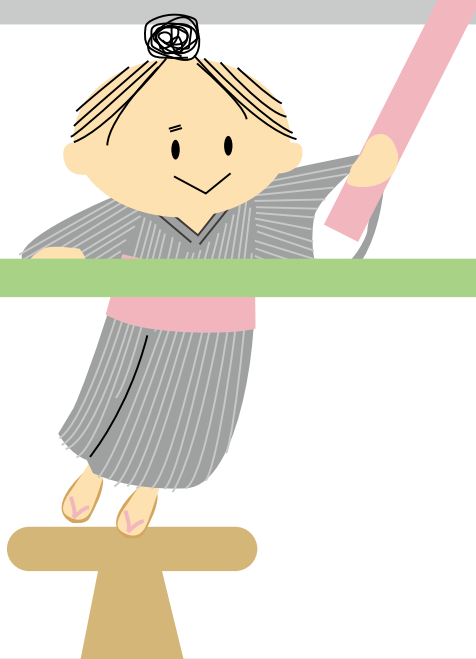
◆ 保育園の中の^{むら}邑づくり！

「保育のコミュニティ」の創生が始まる

新・保育所保育指針から
保育・子育て支援の使命を見つめ直す



報告書



第8回 子ども・子育て支援

開催要項

全国研究大会 2017 in 山口

保育園の中の邑づくり！「保育コミュニティ」の創生が始まる

～新・保育所保育指針から保育・子育て支援の使命を見つめ直す～

新制度のスタートに引き続き、今年度は10年ぶりに保育所保育指針が改定され30年度から新しい指針の下での保育が行われます。そんな中児童虐待や子どもの貧困など、社会的養護を必要とする子どもは増え続けており、益々保育や子育て支援への期待は高まっています。

そこで本研究大会は、以下の5つの目的で開催致します。



- 1) 日常保育が、どのように子育て支援・保護者支援へつながるのか、その可能性を探る。
- 2) 保育園・こども園・子育て支援センターの中の邑作り「保育コミュニティ」へ。
- 3) 「学校」と「子育て支援」のコラボレーションなど地域連携の先進事例を学ぶ。
- 4) 保育や子育て支援活動中に発生するかもしれない災害への対応を研修する。
- 5) キャリアアップ研修6つの柱の1つ「子育て支援」の活用の場にしていく。

開催日時

10月26日(木)～27日(金)

日程	時間	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
			30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30	30
第1日 10月26日 (木)				(受付)	ビフォー スタート 研修会	受付	開 会 式	行 政 説 明	先 進 事 例	パ ネ ル デ ィ ス カ ッ シ ョ ン	熊 本 報 告	移 動 ・ ホ テ ル チ ェ ッ ク イ ン	交 流 会 シ ー モ ー ル パ レ ス	
第2日 10月27日 (金)	受 付	早 朝 セ ミ ナ ー	受 付	分 科 会	ふ り か え り	コ ン サ ー ト	昼 食		特 別 講 演	閉 会 式	記 念 講 演	解 散		
						昼 食 ・ 交 流 タ イ ム			映 画 上 映					

会 場 下関市民会館 〒750-0025 山口県下関市竹崎町4丁目5-1 TEL: 083-231-6401

シーモールパレス・シーモールホール

主 催 日本子ども子育て支援センター連絡協議会（日本子ども子育てネット）

主 管 山口県保育協会 山口県子育て支援センター連絡会

後 援 内閣府 厚生労働省 山口県 下関市

全国保育協議会 日本保育協会 全国私立保育連盟

参加者 600名 施設長・保育士・保育教諭・子育て支援担当者・看護師・栄養士・行政担当者等

参加費 14,000円（会員） 15,000円（一般）

【大会を終えて】

このたびは、「第8回子ども・子育て支援全国研究大会 2017in 山口」を開催するにあたり、ここねっとの皆様、また内閣府・厚労省をはじめ、山口県・下関市の行政の方々のご協力いただき、さらに山口県保育協会の強力なお支えもあって、無事故で有意義な大会を開催することができました。本当にありがとうございました。

全国各地からも450名を超える方にお越し頂きました。そんな中、運営側の不手際からご迷惑を多々お掛けしたが、参加者の皆様の温かな心で包んで頂いた事に心から感謝致します。

私たち山口県は、実行員会を中心に大会の企画や準備のために何度も討議や打合せを重ね、智恵を出し合ってきました。引き受けの大変さはありましたが、それ以上に情報共有や新たな発見により、県内の子育て支援力は間違いなくレベルアップしたことを感じます。

これからもここねっとの皆様と連携を取りながら子ども・子育て支援のために力を注いで参りますので、よろしくお願い致します。

山口県子育て支援センター
連絡会 会長 中川浩一

【大会参加者数】

参加者数 455名 申込者 423名 スタッフ 32名

セッション	講座名	講師名	会場	参加者数
BS-1	子どもに生きる力を～東日本大震災・熊本地震の教訓に学ぼう	柳原志保	シーモールホール①	55
BS-2	子どもも大人も心地よい保育とは	野村直子	市民会館 中ホール	100
BS-3	気かけられ、気かける地域支援	直井みどり	市民会館 リハーサル	34
BS-4	寝る子 食べる子 遊ぶ子 元気	村上千幸	シーモールホール②	73
S-1	コミュカを高めるわらべうた	加藤ときえ	シーモールパレスエメラルド①	99
S-2	絵本の読み方ステップアップ	横山眞佐子	シーモールパレスエメラルド②	65
S-3	伝承遊びは幸せの伝承	中村信子	シーモールパレスダイヤモンド	64
S-4	4年間の継続調査からみた子どもの実態に基づいた支援	大和晴行	シーモールパレスビー	81
B-1	「子どもの『育ち』と子育て支援の課題」	広木克行	シーモールパレスエメラルド①②	98
B-2	「ヒトの子育ての原点を考える」～子どもが育つ・親も育つ～	明和政子	シーモールパレスビー	87
B-3	「乳幼児期における非認知的な心の力の発育と保育・子育て支援の役割」	遠藤利彦	市民会館 大ホール	124
B-4	「保育所保育指針の改定をふまえた食育」	堤ちはる	シーモールホール①	19
B-5	「東日本大震災を経験して伝えたいこと～大切な命を守るために」	佐竹悦子	シーモールホール②	15
B-6	「『子育て支援』のあり方をさぐる」	深澤悦子	市民会館 リハーサル	60
B-7	「子どもの生活と『メディア』」～現状・問題と支援のあり方を考える	原陽一郎	シーモールパレスダイヤモンド	19
ランチコンサート		ちひろ	市民会館 中ホール	232

1 日目

BS-1 (子どもに生きる力を～東日本大震災・熊本地震の教訓に学ぼう～)

1. セッション:ビフォースタート研修 1

日時：平成 29 年 10 月 26 日（木） 10：30～11：45

会場：シーモールホール 1

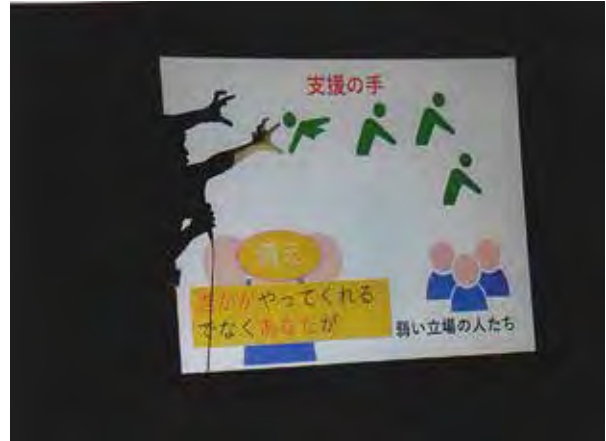
演題：「子どもに生きる力を～東日本大震災・熊本地震の教訓に学ぼう～」

講師：柳原志保氏(歌うママ防災士)

司会：亀田久美子（長府第一保育園）

幹事：児玉ひろ子（愛児園乳児保育所）

記録：平林尚代（姫井保育園） 大平由美子（おおとり保育園）



2. 講演の内容

<講師の略歴>

宮城県多賀市に在住中に東日本大震災に被災する。海から 4km のところに自宅があった。

自宅は大規模半壊し、小学校で 2 週間の避難生活を強いられる。それまで「自分は大丈夫」という思いから備えには無関心であった。

子どもが「寒い・お腹が空いた」と訴えてきても、母として何もしてあげることが出来なかったことを強く後悔した。

被災経験から、「経験しないと気付けないことがある」と分かった。

その後妹家族の住む熊本県へ移住し、普段の生活の延長として出来る防災や、忙しいママでもできる防災を考え、広めるために「防災士」の資格を取る。その 1 年後に熊本地震に遭う。

<災害時等に必要な 3 つの力>

【命を守る力】

Q 1. 職場にいます。あなたは親です。震度 6 の地震が起きました。家に連絡は付きません。あなたは仕事を優先しますか？

～対 策～

○ 命の守り方・安否の確認の仕方を子どもも含めて一人一人が知っておく。
→そのためには繰り返しの訓練・体験が必要

○家・職場の周りを知ろう。
→どこに何があるのか・危険な場所はどこかを把握する。

○家族で「決まりごと」を決めておこう。

①災害が起きたら、それぞれどこに避難をするのか、どういう時にどういう行動をするのか。

→家族同士の安否確認がし易くなり、お互いに安心できる。

②パーソナルカードを作り、持ち出し易い所に置いておく。

→子どもの安心材料になる。

◇ 名前 生年月日 年齢等詳しく書く。

◇ 家族について書く。

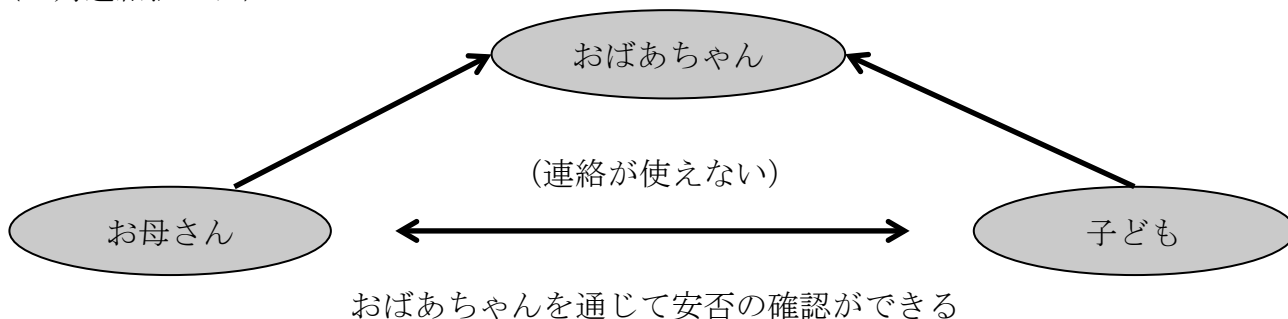
◇ 家族の写真も入れる(心の備え・ケアになる)

◇ 服薬中の薬についても書く。

◇ 笛を付け、10円玉も入れる。

◇ 電話をする先の番号を書く(県外等の方がつながりやすい)→三角連絡法

(三角連絡法とは)



Q 2. あなたは食料担当です。200食の物資が届きました。避難者は1,000人です。あなたは配りますか？

～対 策～

○支援や支援物資はすぐには来ない。

→各自が備蓄しておくこと、物資が足りなくてもしばらくは何とか凌ぐことが出来る。

※特に女性や子どものものは少ないので、各自でしっかりと準備しておいた方がよい。

○家・職場の周りを知ろう。

→どこに何があるのか・危険な場所はどこかを把握する。

○家族で「決まりごと」をきめておこう。

【考える力】

○被災した際、身近にある物を工夫して使う。

(例)スーパーの袋：片方のサイドを切ると骨折などの時の三角巾として使える。

両サイドを切り、タオルをつけるとおむつになる。

ラップ：怪我をしたところに布を当てて、ラップを巻くと包帯の代わりになる。

ゴミ袋：片方のサイドを切ると、帽子付きのポンチョになり、雨がよけられる。

流せないトイレ：洋式トイレの便座を上げ、ゴミ袋をかぶせる。そこにぐちゃぐちゃにした新聞紙をたくさん入れて、何回か排尿したら、口を閉めてゴミに出す。

→日常生活の中で防災グッズを作ることを考えていく

Q3. 家が半壊しました。障害を持っている子どもがいます。あなたは避難所に行きますか？

～対策～

○個別ニーズが必要な人たちへの思いやり、支えあいの配慮が必要になる。

→弱い立場の人たちの存在を知り、考えよう。

○福祉避難所

→一般の人でも来てしまう(本当に支援が必要な子どもを持つ人たちが気を遣い、来られなくなる)

→「福祉子ども避難所」を作る必要がある。

→「誰でも来られる避難所に」・・・様々な事情に対応できるように作ったり、同じ立場の人たちを集めた安心の避難所を作る。

【コミュニケーションをする力】

○普段から友達・地域とつながろう

→行事への参加・挨拶・思いやり・助け合い・協力を重ねることで、いざという時の人と人とのつながりとなる

→困ったときに「辛い」「助けて」と言い合える関係になる。(★「ありがとう」を素直に言える人になろう)

○避難所では避難した人で運営していくことが理想

→一人一役(支援漬けにならない、ボランティアに頼りすぎない)

→運営していく姿を大人が子どもに見せることで、自立への一歩となる

3. 講演を通して明確になったことや課題(制度・人・地域・事業内容など)

<生きる力>～困難をどう乗り越えていくか～

- ・ 命を守る力→災害時において「決まり事」を細かく決めて徹底する。
- ・ 考える力→日常生活の中でサバイバル力を養うことが大切。(普段とは違う不自由さの中で生活できるように)
- ・ コミュニケーション力→普段から友達とつながり、助けを求められる関係を作る。
- ・ 受援力→「助けて」と発信する力を養う(①どんな人が②何のために③何で困っているかのニーズを適切に伝える)

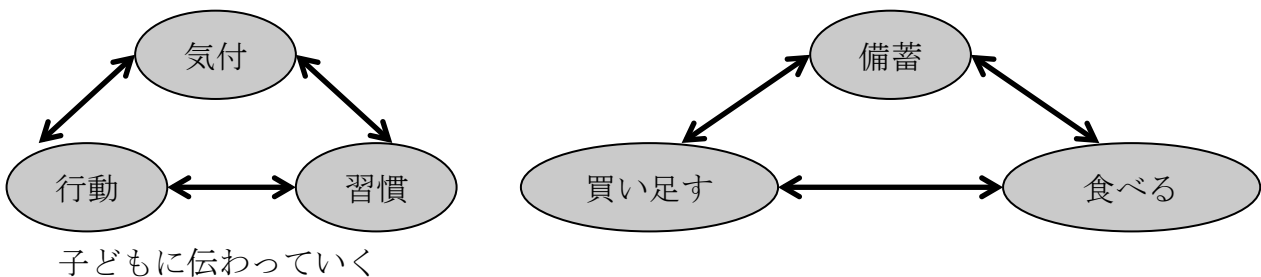
<災害教訓>

- ・ 伝え・・・経験しないと気付けないことがたくさんある
- ・ 備え・・・「Best」は難しいが、「Better」の備えをする
- ・ 活かす・・・同じ後悔を繰り返さない

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

<備えについて>

- ・ 日ごろからの備え
 - > 様々な場所に持ち出せるものを準備する
 - > 自分にとって生活をするにおいて大切なものを準備しておく
 - > 食品は食品で別に袋等に準備する(普段、そこから食べたりして定期的買い足して賞味期限切れ防止)
 - > 車が常に使えるようにしておく(ガソリンは半分減ると満タンに入れ足すなど)

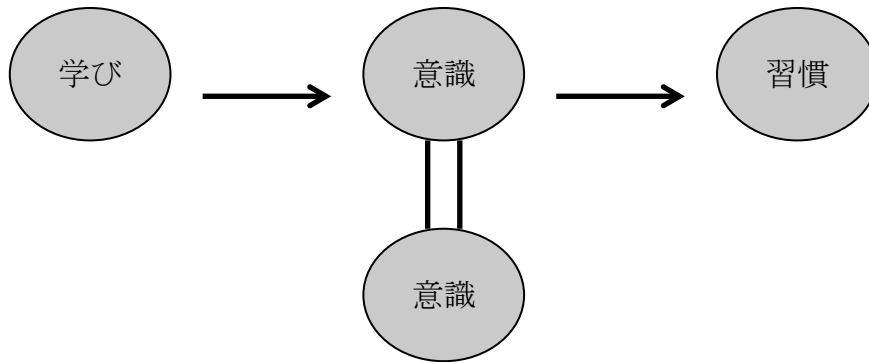


<親や大人が子どもにできること>

- 困難を乗り越えさせる子育て法をする。
 - 見守る勇気が子どもを成長させる。
 - 考える力を身につけさせていく。

「先生が講演をして蒔いた種を皆さんで咲かせてほしい」

「この歌を聴いたときに、防災について思い出してほしい(忘災)」
という思いを込めて、
『花は咲く』という歌を熱唱された。



BS-2 「子どもも大人も心地よい保育とは」

～おさんぽ子育て支援のススメ～

1. セッション：ビフォースタート研修2

日時：平成29年10月26日（木） 10:30～11:45

会場：市民会館中ホール

演題：「子どもも大人も心地よい保育とは」 ～おさんぽ子育て支援のススメ～

講師：野村直子氏（new education Little Tree）

司会：原 睦美（幸町保育園）

幹事：三木 恵（聖母園）

記録：青木美知子（愛児園平川保育所） 中川裕美（おおとり保育園）



2. 講演の内容

◎なぜ“おさんぽ”なのか？

自然の力を借りよう

日本の過去には、稲穂や干し柿など暮らしと自然が一体化していた

生活が都市化した現代は家から一步も出なくても済む あえて出ることが大事

◎自然の中での保育

子どもの姿・・・身体的な成長（身のこなし・体力・感覚）

内面の成長（感情・感じる心・考える力）

保護者の姿と変化

Ex. 雨の日のさんぽ

親 心配して止めたがる **保育者** ゆったり構え 大丈夫だよ ⇒ **親** リラックス

子どもの力を信じる体験 除菌ばかり ⇒ 力が抜ける

おさんぽ子育て支援

- ① 目的地と目的を決める・・・ゆる～く集まる なんとなく含んでいる 気軽に（靴を脱がない）

② ○○公園に行きます・・・～道中、道草しながら のんびり

親 ダメよ ⇒ やってごらん (信頼) に変わる

◎自然の中で育つ子どもと大人

・2つの体験

アドベンチャー的な体験

Ex. 小山を登ったり、滑ったり 挑戦 (失敗体験・チャレンジ・達成感・ヒヤヒヤする体験)

感性的な体験

Ex. ジョロウグモをつかむ子 (写真) プニプニする なんだこれ? (観察→調べる→解る) 探求・追求する体験

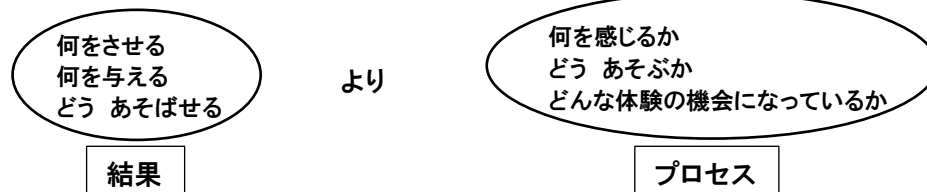
・安全についての捉え方

擦り傷・切り傷は成長の糧

「ヒヤッとする体験」「失敗体験」「自分で感じる体験」=学びにつながる **リスク**

「命に関わる危険」「子どもが予知できない危険」=体験させてはいけない危険 **ハザード** 大人が判断

・180度視点を変えてみる



*アイデアを作る場を作ることが大事 自然=子どもがあそびを作り出す

◎「おさんぽ子育て支援」の場づくり

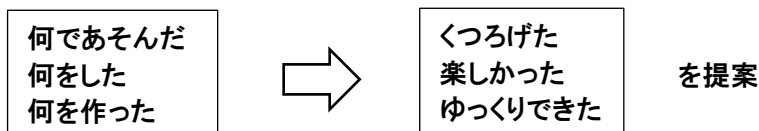
・どんな場を作るのか?

キーワードは“楽”

FUN と JOY
×
楽をする → 活動がシンプル
楽を感じる → リラックスしたくつろいでいる場

*保育者がリラックスしその場を楽しむことが大事

・何を提供するか?



DO (やること)

BE (質)

*リラックスでき、話しかけるすきをつくるのが大事

3 講演を通して明確になったことや課題 (制度・人・地域・事業内容など)

子育て支援に大切なこと・・・安心安全の基地作り

保育者は子どもと親のつなぎ役 子ども同士のトラブル (関わり) 体験は大事であることを伝えていく

表現しやすい場の提供・・・リラックスの場 キーワードは**楽** 活動をシンプルに

やること（DO）⇒質（BE）の提供 結果⇒プロセス重視

4 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

良いも悪いも含んだ肯定的な世界へ・・・「あるがまま ないがまま そのままのあなたでOK」
子ども一人一人に個性があらわれる
「みんなちがって みんないい」

一人の強いリーダーに従う時代（過去2000年間）から一人ひとりが活躍する時代へ（2000年頃から）

BS-3 (気かけられ、気かける地域支援)

1. セッション:ビフォースタート研修3

日時：平成 29 年 10 月 26 日 (木) 10:30~11:45

会場：市民会館 リハール室

演題：「気かけられ気かける地域支援～地域の子どもの健康を守り育てる～」

講師：直井みどり氏 (カナン子育てプラザ 2 1 看護師：病児保育専門士)

司会：大方邦江 (しょうや保育園)

幹事：井上拓也 (小月保育園)

記録：光田和子 (聖母園) 佐藤みどり (錦江保育園)



2. 講演の内容

● 保育園の看護師になって

園児 地域のひとりの子どもや保護者・保育者集団の実態や課題を分析して研修やマニュアルにし、保護者や保育者と共に健康な生活が送れるように常に気かけ一緒にいることを心がけた。

● 保育園保険業務の活動

・ 園児の健康支援

(健康状態の把握) 連絡表、食事・生活リズムについてのアンケートなど 0~2 歳児担当制を取り入れている。

(健康管理) 感染症罹患状況、今日の子どもの様子など掲示

(健康教育) 手洗いチェッカーによる手洗い指導

救急法、熱中症対策など掲示

(罹患などのケア) 感染症発症時の対応-保健日より号外でお知らせ

体調不良時の対応-体調不良・事故での保護者への連絡経過表、
受診依頼書の活用

- ・ 障害児の対応-特殊与薬依頼書 緊急時の指示 個別対応シート 緊急時の役割分担表
けいれん発作時のチェックシートの活用
- ・ 食物アレルギー児への対応-特定原材料 27 品目 家庭における食べていない食品の摂取
状況アンケート 生活管理表の活用 誤食対策マニュアル アレルギー対策マニュアル
- ・ 健康な環境づくり
（事故防止・安全対策）身体発達に視力・聴力・視野・体幹・空間認知を
入れて事故の内容を具体化していく。
リスクマネジメントの報告、経過をシステム化、リスクマネージャーの選出
誤嚥・窒息事故防止マニュアル 食べる姿勢や保育者の配慮マニュアル

（職員教育・連携） 救急法の講習
（衛生管理）排便処理の手順 吐物処理法のマニュアル化
- ・ 健康子育てネットワーク 保健だよりを毎月発刊
- ・ 地域への子育て支援 子育て支援センター、一時保育、病後児保育
子育てヘルパーの活動

2. 講演を通して明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）

- ・ 保育園の看護師になって 子どもの体力・免疫力のないこと、生活リズムが不安定、感情のコントロールができない、バランス感覚が悪いことなど、保護者の保育力のなさが気になった。
- ・ 子どもの成長・発達を医療の立場からではなく、子どもの側から表現することを学び、自分の価値観ではなく、相手の価値観の中で良い方法を探るようにした。
- ・ 保育の中で大切にしてきた4つの活動
 1. 保護者との共同子育て
 2. 子どもの為の実体験
 3. 親の養育力アップの為の活動
 4. 親と子どもをつなぐ活動

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

- ・ 子どもと保護者、保育者の健康を保持し、子どもを主体とした保育が実践できるように



開会式

13 : 00~13 : 40
下関市民会館大ホール



総合司会：姫井保育園 水野勝文氏



開会の辞
山口県子育て支援センター連絡会
会長 中川浩一氏



主催者あいさつ
日本子ども子育て支援センター連絡
協議会 会長 木本宗雄氏



ビデオメッセージ
内閣総理大臣 安倍晋三氏



来賓祝辞 山口県副知事
弘中勝久氏

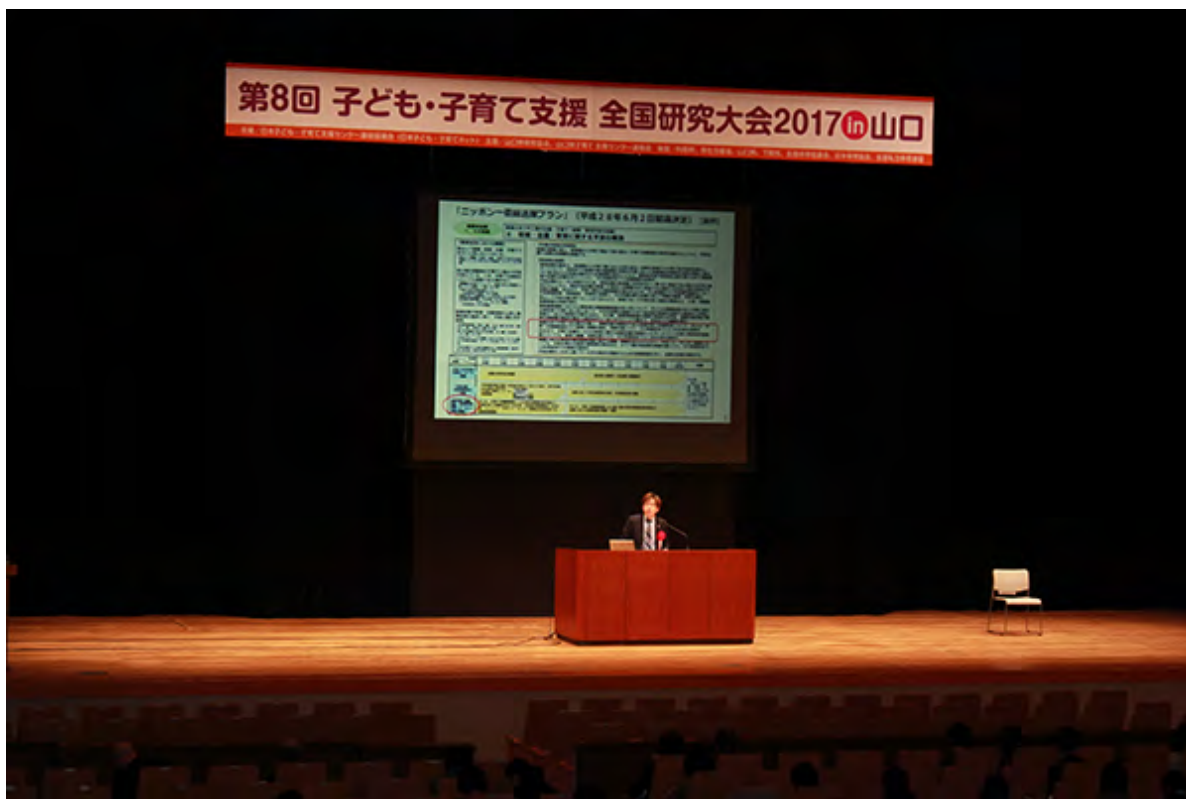


来賓祝辞 下関市副市長
三木潤一氏



【来 賓】
厚労省 子育て支援課 統括課長補佐 竹中大剛氏
山口県 副知事 弘中勝久氏
下関市 副市長 三木潤一氏
九州保育三団体 会長 佐藤成巳氏
全国私立保育連盟副会長 橘原淳信氏
日本保育協会 國重俊亮氏
山口県保育協会 副会長 出井眞治氏

行政説明（厚生労働省 子育て支援課 統括課長補佐 竹中大剛氏）



先進事例 『みんなで子育て応援 山口県』

（山口県こども政策課課長 森光淳子氏）



パネルディスカッション 26日(木) 15:00~17:00 市民会館大ホール



コーディネーター
山東こども園
村上千幸 氏



パネラー
大阪総合保育大学
大方美香 氏

武庫川女子大学
倉石哲也 氏



パネラー
和光保育園
鈴木眞廣 氏

東京成徳短期大学
田中浩二 氏

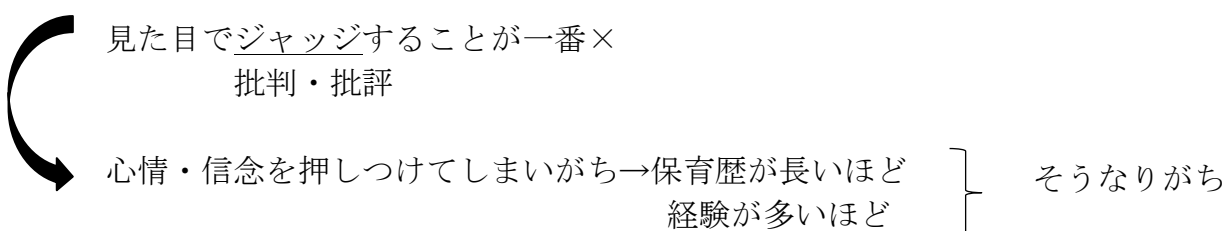
パネラー① 大阪総合大学 大方美香氏
子育て支援の課題と展望～保育所保育指針改定～

- ・ 子育て支援→保育園にいるときだけではない
センターに遊びに来ている時だけではない
- ・ 何を支援するの？→保護者の自己決定の力
応援する→育てる
- ・ 大人社会の変化 子どもの生活の変化→ 出会いにくい世の中になった
あらゆる生活形態が変わった
- ・ 相談する中で答えを急がないこと。
今悩みがないお母さんでも野命に悩みが出てくる。
- ・ 併設型の支援センター
保護者が関わっている様子を見ることが出来る
提供するだけが子育て支援ではない
せっかく同じ所にあるのだから別々にするのではなく側で保育が見られるように
子どもモデルがみられるように

パネラー② 武庫川女子大学 倉石哲也氏
愛着の回復と子育て支援

- ・ 子育ては楽しいか？そもそも楽しそうにやらないといけないのか？
仕事で輝いて子育てを投げたらいけないのか？
しんどいと叫んだらいけないのか？
↓
○支援者が親の本音と向き合えているか？（指示されるのが嫌）
近年スマホが普及する中でそもそもスマホを使用しての子育てはダメなのか

ママ友づくりが苦になっている
これを全面に出すのがいいのか？
↓
行き場のない母親が出てくる。
- ・ 子育て支援は本当にいるのか？ ◎支援の逆機能化を考える
支援者の自己満足ではないか？



パネラー③ 和光保育園 鈴木眞廣氏
子どもと親と保育者でつくる子コミュニティー

- ・親は忙しい→けれども子どもと関わり合うこと無しでは親が親として育たない



この事実からは抜け出せない

- ・そのために共育て保育や子育て支援の中で子ども親も一人一人が命を輝かせて生きていることのうれしさを語り合う、分かち合う関係づくり（風土）が重要となる。

育ち合いの場づくり ★育てるといふより気付いたら育っている



保育園

親は日頃の保育の中の姿をみたい！
大人とではなくお友だちとの中で成長を見てもらう

} どういう風に育っているかを、それを伝える！！



写真を使って（小さな本に！貸出も！）

パネラー 東京成徳短期大学 田中浩二氏

山口県内調査「保育所保育の現状と保護者に対する子育て支援に関する調査」
から見えてきたこと

パネルディスカッション「保育における子育て支援」で「保育所保育の現状と保護者に対する子育て支援に関する調査（山口県調査）から見えてきたこと」と題しての報告があった。

報告では、保育所保育指針の改定等を踏まえて、改めて保育所での保育が保護者の子育てに有効であるかなどの調査の趣旨説明をするとともに、調査方法、結果の概要の説明があった。

主な結果の概要としては、保育所や保育士が思っている以上に、保護者は現状の保育保育に満足しているという結果が見られた。一方で、今後保育所保育がより保護者の子育て支援を進めていくにあたっては、例えば保育園内で作られる指導計画等をはじめとして、日常に行なっている保育の意図や背景を保護者と共有していくことや、保育者としては保護者に伝えることを躊躇するかもしれない子どもの課題等もしっかりと伝えていくことが保護者の子育ての支援につながることを示唆された。



発表者
日本女子大学
吉澤一弥 氏

発表者
浦和学園大学
丸谷充子 氏



交流会

18:30~20:30
シーモールパレス



歓迎の挨拶
下関市副市長
三木潤一 氏



来賓祝辞
厚労省 子育て支援課
統括課長補佐
竹中大剛 氏



来賓祝辞
山口県保育協会
会長 渡邊正善 氏



【出し物】

関門名物『バナナのた
たき売り』

文化伝承の立派な
芸、あっという間にバ
ナナも完売！

超もりあがりました！



次期開催地アピール
埼玉ココネット
会長 剣持浩 氏

2日目

S-1: 「コミュカを高める わらべうた」

1. セッション:ビフォースタート研修4

日時:平成29年10月27日(金) 8:00~9:00

会場:シーモールパレス エメラルドの間①

演題:「コミュカを高める わらべうた」

講師:加藤ときえ氏

司会:西野紀代子(大学院幼児学院)

幹事:稲永利恵(木の実保育園)

記録:井上寿賀子(いずみ保育園) 中川知子(勝山保育園)



2. 講演の内容

わらべうた実技

- ・さんと いち に
- ・あまぎけ ほしいな
- ・たこ たこ あがれ
- ・どんぐり ころちゃん
- ・もつれんな
- ・顔あそび
- ・あとだし ジャンケン

講師の先生の歌声に合わせて実技
笑顔あふれる研修となりました。

3. 講演を通して明確になったことや課題(制度・人・地域・事業内容など)

わらべうたの言葉に込められた思いや、リズムの心地よさによって温かさが広がり
仲良くなることができる。

やり方を変えていけば、誰でもできる。

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

人と人とのつながりが希薄になり、コミュニケーション力の低下が叫ばれている今色々な
場で、わらべうたを取り入れて、つながりを深め人として生きていくうえでの優しさや、
温もりを育ててほしい。

S-2：「絵本の読み方ステップアップ」

1. セッション:早朝セミナー2

日時：平成29年10月27日（木） 8:00～9:00

会場：シーモールパレス エメラルドの間②

演題：「絵本の読み方ステップステップ」

講師：横山 眞佐子氏

司会：村田香織（すみれ保育園）

幹事：廣野郁子（清末保育園）

記録：野村典子（貞源寺第2保育園） 梶井由紀（いずみ保育園）



2. 講演の内容

『年齢別の絵本の選び方・おすすめ絵本 読み方について』

・ 赤ちゃん

浴びるようにたくさんの絵本を読んであげる

子どもの反応を楽しみながらスキンシップのような声で読む→嬉しい気持ち→感情へとつながる

「ばびふぺぽ」「ざじずぜぞ」など濁音を好む 大小強弱指差して読む

「こちょこちょこちょ」「バナナです」「しっぽ」「じゃあじゃあびりびり」

「ぼんちんぱん」「こぶこぶこぼこぼ」

・ 2歳

人との関係(1対1・一緒に・お友達と半分こ)が分かる頃

子どもの心の動き化をを考えて読んでやる 読みながら間をつくる 子どもの心の動きを考える

「ひとつづつ」「りんごがころん」「もりのおふろ」「おくちはどーこ」

「おつむてんてん」「たまごのあかちゃん」

・ 3 歳

物と言葉が一致し想像がふくらむ頃

「これはねこです」「カレーライス」「おしくらまんじゅう」「てじな」「なにをたべてきたの」「3びきのくま」「おおきなかぶ」「からすのパンやさん」「わたしおべんきょうするの」

・ 5 歳

自分中心から他の事が気になり始め、社会性が身に付く

してはダメなことをしたくなり、人を試すようになる

「しょうぼうじどうしゃじふた」「3びきやぎのガラガラドン」「ベーコンわすれちゃだめよ」「ピエールというライオン」

3. 講演を通して明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）

40年前は8か月頃から絵本を勧めてきたが、現代は昔ほど静かではなく映像、音がいっぱい子ども覚醒が早いので4か月頃からでも悪いものが入る前に良い物であれば与えてよいのではないかな。

子どものしていることには絶対理由、意味がある（理由は様々）－保育者が理解する

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

支援センターなどたくさんの人に向けて絵本を読む場合、皆が「その本いいね！」と言ってくれる内容のものを選ぶ必要がある。ひとりひとり様々な事情（母子父子家庭、親がいない など）を抱えているかもしれないので、1人にグサッと刺さる内容ではだめ。本をきちんと選択できる力がもてるようになると良い。

S-3：「伝承遊びは幸せの伝承」

1. セッション:早朝セミナー3

日時：平成29年10月27日（金） 8:00～9:00

会場：シーモールパレス ダイアモンドの間

演題：「伝承遊びは幸せの伝承」

講師：中村信子氏（むかしなつかしお手玉会代表）

司会：池永陽子（聖母園）

幹事：長阿弥牧里（のあ保育園）

記録：山本良子（でしまつこども園） 戸成和江（小月保育園）



2. 講演の内容

- ・ おてだまは地球に優しいおもちゃである。
- ・ お手玉は理想的なもちゃ→片手で持てる。音がする。香りがする。危なくない。
- ・ 耳で聞いて目で見て手で触って口で唄う。
- ・ 実技（お手玉）をしながら話しと説明と歌
- ・ 曲を聴き歌に合わせてお手玉の実技

3. 講演を通して明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）

- ・ 時代の流れと共に核家族化が進み親子での遊びの時間、遊び方が変化してきた。
- ・ 自然の物を生かし、自分達で考えて作って遊ぶという姿が少なくなった。
- ・ 遊びに関してはデジタル化が進み器械が多くなった。
- ・ 課題としては
伝承遊びを継承していく大人が少なくなってしまった今、どのようにして広めていくか、もっとたくさんの人に感心を持って欲しい。

“おてもやん”の歌とともに登場



大きい布にお手玉をたくさん入れて！

広告紙で作った折りたたみ自由なエコ帽子！



その日お誕生日の先生方にお祝いのお手玉シャワー！



トイレットペーパーの芯と折り紙でエコおもちゃのできあがり。

あっという間の1時間でした。

S-4：「4年間の継続調査からみた子どもの実態に基づいた支援」

1. セッション:早朝セミナー4

日時：平成29年10月27日（金） 8:00～9:00

会場：シーモールパレス ルビーの間

演題：「4年間の継続調査からみた子どもの実態に基づいた支援」

講師：大和晴行氏（武庫川女子大学 講師）

司会：西山 忍（ひずみ保育園）

幹事：中川則子（勝山保育園）

記録：実渕良恵（小波保育園） 家入摂子（でしまつ保育園）



2. 講演の内容

●調査から見えてきた3歳から5歳のポイント

〈姿勢〉 3歳頃の姿勢からその後育ちが停滞している

〈体力〉 3歳頃の差が最も大きく、その後もその差が維持されている

〈器用さ〉 2歳以降、親指を使ったり、間接のコントロールの獲得が遅れている

3. 講演を通して明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）

●3歳以降のからだの課題を考えると子どもの姿勢、体力、手指の器用さを育むために

1～2歳の頃から

- ・ 力を出す・発揮する経験保障
- ・ 上肢を十分使う経験保障
- ・ 人（大人）と遊ぶことによる少し難しい動作経験の保障

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

- ・ 歩く・走る・跳ぶといった基礎的動作の十分な保障
- ・ 活動の重要性の啓発（保護者に対して）

B-1: 「子どもの育ちと子育て支援の課題」

1. セッション:分科会1 (子どもの育ちと子育て支援の課題)

日時:平成29年10月27日(木) 9:15~11:30

会場:シーモールパレス エメラルドの間

演題:「子どもの育ちと子育て支援の課題」

講師:広木 克行(神戸大学名誉教授)

司会:赤木由美子(みやののもり保育園)

幹事:登根明美(でしまつこども園) 中川則子(勝山保育園)

記録:奥山れいな(しおかぜの里保育園) 吉木美幸(たぶせ保育園)



2. 講演の内容

子どもの「育ち」と子育て支援の課題

1、「育ち」のもつれと子どもからのサイン

- ・もっといっぱい触って欲しい
(触覚が敏感。自分の苛立ちの解消方法(ドロドロ・ネトネト・ベトベト))
- ・私をちゃんと見て欲しい
(アイコンタクトは心理的な要求。子どもの行動を読み取る)
- ・怒らず笑顔で話しかけて欲しい
(ダメ出しの教育は自己否定につながる)

2、子育てに問われていること

- ・脳・心・意思は、9歳の壁を超えて、本格的な教育になる。
- ・大人時間と子ども時間の調整と切り替えが必要
- ・応答的關係は子どもの時間を調整することで、子どもの育ちが豊かになる。

3. 講演を通して明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）

いじめ(不登校)の増加は、自分の苛立ちの解消方法がわからない

教育はなぜ、教教ではないのか?教教では人格形成が破たんする。

そこを担っていくのが保育や子育て支援

子育ての方法を学ぶ

子ども理解・保護者理解、子ども達や保護者の苦悩をどうとらえるか。

甘えをしっかりと受け止める(交換条件ではなく)

ドロドロ。ネット
ネット・ベタベタ
から大人がきれい
にすることで包
まれた安心感に
つながる

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等 環境はこのままでよいのか？ 本気で考えてみよう

- ・ 保育園の仕事は子どもを見守る。育つ力を引き出す体験を沢山させる事が大切
- ・ 子どもは興味。観察・模倣を力にしながら育つ
- ・ それには環境が必要。

保育とは、育ちを体験し、体験を促すのは環境である。その中で、親を支えるのは子育て支援であり地域に貢献していく役割を担っている。

B-2：ヒトの子育ての原点を考える

1. セッション：分科会2（ヒトの子育ての原点を考える）

日時：10月27日（金）9：15～11：30

会場：シーモールパレス エメラルドの間②

演題：「ヒトの子育ての原点を考える」

講者：明和政子氏（京都大学大学院教育学研究科 教授）

司会：田丸絵美（ルンビニ保育園）

幹事：朝川敏江（須恵保育園）

記録者：福岡純子（専立寺保育園） 多賀谷久美（錦江保育園）



2. 講演の内容

- ・ヒトとは？ ヒトに特有のはたらきとは
（生物としてのヒトがもつ独自の行動・心理）
- ・それはどのように なぜ進化してきたのか
（行動・心理の系統発生、生物学的・基盤）
- ・それはいつ、どのように獲得されるのか
（行動・心理の個体発生・定型-非定型性）

【現状】 発達障害の急増→半数は「原因不明」

※オーダーメイドの発達支援（個性）をおこなっていく大切な時代

◎他者の心を理解する2大神経ネットワーク

- ・ミラーニューロン システム（情動的共感）
- ・メタライジング（認知的共感）…人間にしかないもの

◎脳の発達に最も影響を受けやすい時期

胎児最終2ヶ月・8ヶ月で過剰なシナプスは刷り込みされる
大人のレベルに完成するのは25～30才

3. 講演を通して明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）

感受性期→この特別な時期に環境の影響を受ける（今後の方向性となるので逃さないで）

- ・ 子供の心を支えるだけでなく、身体の仕組みを知りケアする
- ・ 子供の良いところをいかしてチャンスを社会が提供してあげる

※ 思春期の子供が赤ちゃんに触れたり関わる機会を増やしていただきたい。

（将来の子育てへとつながる）

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

- ・ 赤ちゃんと母親のメンタルヘルスケアをしていく。
- ・ AI など次世代の子育てに使えるものをどう使い分けるかが大切
「子どもが育つ 親も育つ」講師の先生が大切に思われておられる

B-3：「乳幼児期における非認知的な心の力の発達と保育・子育て支援の役割」

1. セッション:分科会3（乳幼児期における非認知的な心の力の発達と保育・子育て支援の役割）

日時：平成29年10月27日（金） 9：15～11：30

会場：下関市民会館 大ホール

演題：「乳幼児期における非認知的な心の力の発達と保育・子育て支援の役割」

講師：遠藤利彦氏（東京大学大学院教育学研究科・教授

同附属発達保育実践政策学センター副センター長）

司会：志満慈子（専立寺保育園）

幹事：河島節子（二葉保育園）

記録：國弘恵子（錦江第2保育園） 弘田靖昌（ルンビニ保育園）



2. 講演の内容

・子育てにたった一つの理想形はない。一人一人違う大人と子ども、個性と個性の組み合わせの中でほどよい関係をつくりながら、その子の個性を活かし、さらに自分たちが置かれた状況を現実的に見据えながら、それぞれの形を実現していくことが子育ての本質である。

●生涯発達における乳幼児期の布置

- ・新保育所保育指針「養護」＋「教育」乳幼児期には固有の「教育」があるのでは？
新保育所保育指針にある、第1章 総則 4. 幼児教育を行う施設としての共有す

べき事項にある（2）幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を育む中核となるのはアタッチメント（不安・恐怖を感じたとき特定の信頼できる大人にしっかりくっついて安心感を得て、安定感に浸ろうとすること）である

- これからの「保育」は “Care” and “education” 養護の中核はアタッチメント and 教育である。基盤は非認知的能力すなわち自己と社会性の力を身に着けることである。

保育者は「“Care” + “education”」ではなく「“Care”の中に “education”が含まれている」ということを認識し、“Care”の質を高めること自体で“education”を高めていく。

●縦断研究が示すアタッチメントの大切な役割

剥奪研究 「ルーマニアの捨てられた子ども達」・・・乳幼児期のアタッチメントの剥奪→特に自己と社会性発達に長期的ダメージ

介入研究 「ペリー就学前計画(アメリカ)」・・・乳幼児期の保育が40歳時の経済状態・幸福を分ける

* 「認知」以上に「非認知」能力を促すことを通して生涯発達に影響

幸せの差・・・非認知的能力（自己と社会性の力）を身に付けたかつけなかったかで分かれる。

自己・・・自制心・自立心・自尊心・自己肯定感

社会性・・・人の気持ちがわかる・人との関係を維持する力・協調性・共同性

◇家庭外の安定した大人との関係→非認知的能力すなわち自己と社会性の発達を保障することになる。

◇就学前の子どもに国・自治体がお金を使うことに一番将来的に経済的効果がある

自制心研究 「マッシュマロ・テスト」・・・自制心を身につけた子→その後の学業成績や社会的成功を長期に予測

●アタッチメントと安心の輪

一日に何回も繰り返されるアタッチメント→保護してもらえることへの確かな「見通し」→「見通しに支えられての自発的「探索」→「一人でいられる能力」=自律性の獲得・拡張

●アタッチメントと心の発達

子どもの身体は未完成の状態では負荷がかかると一番ダメージを受けるのは脳である。

- 安定したアタッチメントの関係の中でくずれた感情を制御（立て直し）と感情の調律・映し出し・寄り添いを経験する→子どもの自他に対する基本的信頼感及び自律性・自己効力感さらには自他の心身状態の的確な理解や共感性・向社会性などの発達に深く関わる。

●情緒的利用可能性の大切さ

- 養育者は子どもの心と身体の状態にシグナルを発信してきたとき、的確に読み取り

素早く応答していく（敏感性）特に必要とされないときは、子どもの活動にあえて踏み込まない（侵害的でない）ことが重要である。

3. 講演を通して明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）

- ・乳幼児期の安定したアタッチメントの関係は生涯発達に影響し、生涯の幸せにつながっていく。

「認知」以上に「非認知」能力を身に付けることが重要である。非認知能力とは自己と社会性の力を身に付けることでありそれは安定したアタッチメントによる安心の輪の獲得・拡張によって身に付けることができる。

- ・新保育所保育指針「養護」＋「教育」乳幼児期には固有の「教育」があるのでは？
- ・養護の中核はアタッチメントであり、教育の基盤は非認知的心すなわち自己と社会性の力である。

「“Care”＋“education”」ではなく“Care”こそが“education”がつながるという意識で“Care”の質を高めた保育をしていくことが大事である。

- ・子どもを主体とした概念での大人が手を出し過ぎない。子どもが求めてきたときに情緒的にかかわる。

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

○子どもに関わる大人はどんな特性を持っていればよいか

- ①敏感的事であること
- ②侵害的でないこと（求めているときには、あえて何もせず見守る。）
- ③環境を構造化すること（おもちゃの配置や種類、子どものグループ設定、楽しい遊びの提供、安全へ配慮した支え）
- ④情緒的にあたたかいこと

◎大人は子どもを主体とした概念での情緒的利用可能性を持った存在である。いつも子どもの状態を気にかけて、その後ろを心配してついて回ったり、転ばぬ先の杖になろうとして先回りしたりするのではなく、どっしりと構え、子どもが求めてきたときに情緒的に利用可能な存在であればよい。

直接的な手助けをするのではなく、エールを送る応援団。子どもは活動していても、ちらっと見てエールを受けることでまた没頭する。自分の世界で自発的に遊び、実験・発見する。

B-4： 「保育所保育指針の改定をふまえた食育」

1. セッション:分科会4（保育所保育指針の改定をふまえた食育）

日時：平成29年10月27日（金） 9：15～11：30

会場：シーモールホール①

演題：「保育所保育指針の改定をふまえた食育」

講師：堤ちはる氏（相模女子大学教授）

司会：石川千加（ひがし子ども園）

幹事：吉村晴美（ルンビニ保育園）

記録：佐竹 絵莉（しおかぜの里保育園） 中村 慶子（やよい保育園）



2. 講演の内容

- ・乳幼児の食生活について
- ・新しい「保育所保育指針」の食育
- ・乳幼児の食事をめざすもの
- ・さまざまな「ご食」について
- ・食事の提供を通して生まれるもの

3. 講演を通して明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）

- ・新保育所保育指針で「食育計画」を全体的な計画に基づいて作成し、“保育の一環”としての食事実践ということを強調
- ・手段、目的を明確にしたうえで職種の専門性を生かし、職員全員が食育を進める
- ・若い世代は他の世代に比べて朝食欠食割合が高く、栄養バランスに配慮した食生活をしている人が少ない。地域に受容される保育所になることで、食育に協力してくれる地域の関係者を保護者に紹介することができる
- ・子どもの食事について困っている親は多くそれぞれの問題に助言も必要だが、どの問

題にも共通する解決策は食事時間が空腹で迎えられるよう生活リズムを整えることが重要である

- ・ 咀嚼機能や食べる機能の発達を考えて子どもに合った食事の提供を保護者と共に行う。また、食事の自立を支援していくことが成長、発達を促す支援となる
- ・ 食事はエネルギーや栄養素の補給の場、家族や友人とのコミュニケーションの場、マナーを身に付ける教育の場となる。保護者が食事のマナーを知らない為に教育が出来ていないことが増えている。具体例を示しながら食事の重要性を伝える必要がある

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

- ・ 食生活の支援では家庭での食生活は保育所側から見えにくいので経済的な視点も忘れない
- ・ 通常的生活や保育の中で食事の提供での取り組みと調理、栽培のイベント的な取り組みの2つの要素を取り入れることが大切
- ・ 母乳は鉄分が少ないがフォローアップミルクは鉄分が多いため粉ミルクに抵抗がある人でも料理に混ぜて使う方法がある
- ・ 丁寧に年齢や成長に合った食事を提供する必要がある。年齢の違う兄弟に同じものを与えることは丸飲みや早飲みになり、肥満のリスクが高まるため良くないことである

B-5：「東日本大震災を経験して伝えたいこと～大切な命を守るために」

1. セッション:分科会5 「東日本大震災を経験して伝えたいこと」

日時：平成29年10月27日（金） 9：15～11：30

会場：シーモールホール②

演題：「東日本大震災を経験して伝えたいこと～大切な命を守るために」

講師：佐竹悦子氏（防災・減災教育 ゆりあげかもめ会長）

司会：吉光智恵（ルンビニ保育園）

幹事：柳井繁子（石井手保育園）

記録：片岡奈保美（すみれ保育園） 倉重静香（嘉川保育園）



2. 講演の内容

※地震発生から、保育所子どもたちと職員の避難の詳細について

※保育所避難訓練マニュアル

保育士の使命は「命を守ること」…地域に応じたあらゆる最悪を想定し、マニュアルの見直し不安を取り除き冷静な対応ができる。

① 検証する（実際に動いて自ら確認。） ②マニュアルの共通理解と共有

・ 作って安心ではなく、冷静な判断と行動が出来るように、繰り返し行うこと。

実践 → 振り返り（各自の行動チェック） → 反省・マニュアルの変更

※伝えたいこと

①自分の命は自分で守る ②家族マニュアルを作成すること ③職場で万全はありえない

④自助・共助・公助

・ 地域の避難訓練に参加し、体制など理解。

- ・ 各家族、個人における非常時持出し品の確認。最悪に備えてできることを増やしていく。
- ・ 大事な共助ができているか。

※手作りランプと、コンロの作り方。(実践)

3. 講演を通して明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）

*防災教育の市民団体 「ゆりあげかもめ」…2014年2月からの東日本大震災の記憶を語る集いから始まり、同年7月からは「命を守るためにできること」を学び伝える、市民団体として活動している。

※多くの命が失われた逃げなかつた理由。

- ・ 口頭伝承の過信、安全な場所という思い込み。
→避難するものに同調しない。
(防災無線のトラブル、消防サイレンの不明度、避難指示の呼びかけ届かない、避難できない人を置いていけない、避難かとどまるかの判断と決断の壁)

※ 心がひきおこす大きな問題 →メンタルヘルス対応の少なさ
(子どもが抱える問題、家庭の問題)

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

※継続して行っていること

- ・ 子どもたちを見守り続けること。
「一人じゃない、一人で頑張らない」→夢や希望はかなうもの。
- ・ 風化させない努力をすること。他人事ではなく、いつ起きるかもしれない災害に

○生きたかった命がある。(消防士、中学生)

○粗末にしていると思える現実。(自殺、殺人事件)

○命を守るための方法や知恵、勇気があれば、心に余裕が生まれる。

○ぼうさい学校の開催。

◎身体を、心を傷つけるのは自然災害だけではない。

心の余裕は、冷静な判断につながる。

自分の住んでいる町を知る。

B-6：子育て支援のあり方をさぐる

1. セッション：分科会6（子育て支援のあり方をさぐる）

日時：10月27日（金）9：15～11：30

会場：市民会館リハーサル室

演題：「気かけられ気かける地域支援～地域の子どもの健康を守り育てる～

講者：深澤悦子氏（広島都市学園大学）

司会：桑原弘樹（ルンビニ保育園）

幹事：香川洋子（慈光保育園）

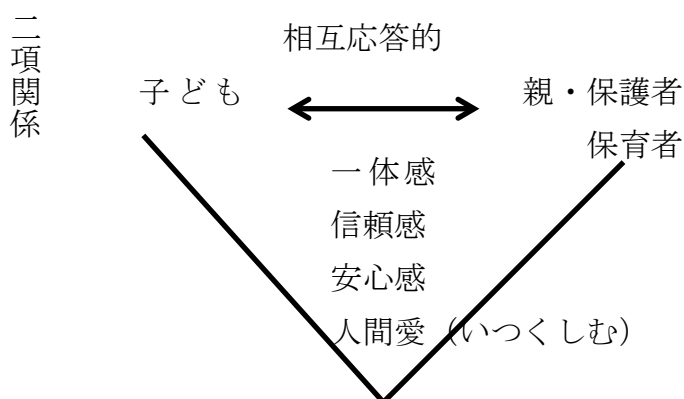
記録者：平尾まどか（小波保育園） 檜谷志依（川西保育園）



2. 講演の内容

・お母さんたちは本もたくさん出ていてたくさんの情報量があってもそれでも支援センターに来られるのはなぜか？

→これは仲間が欲しい、ネットワークの関わりの中で人間はささえられていくから。



・子どもがよりよい生き方をしていく為に保護者1人ひとりの生き方を支援していく

この関係ができてから

モノ群像（社会・自然）指さしが始まる

3. 講演を通して明確になったことや課題（制度・人・地域・事業内容など）

- ・カリキュラムの中に地域を取り組む
地域全体が幸せにならないと保護者も子どもも幸せになれない。

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

対処法だけで終わらない

今いちばん この子に必要なことは何か すぐに答えを出すのではなく、この子の情報を集計して、よりよい方法はどれなのか。情報を縦に並べて優先順位を決めていくこと。個々と集団をつなげること。

その人をきちんと見極めて子どもも保護者も独りぼっちにしない、そして保護者も独りぼっちにならないようにみんなで共有する。

子どもがよりよく生きるために保護者が前向きに子育てできるようにもっといい方法はないのか、そのプロセスが大事で子ども・保護者に応答し、信頼関係を築いていく。

B-7: 「子どもの生活と『メディア』」

1. セッション:分科会7 (子どもの生活と『メディア』)

日時:平成29年10月27日(金) 9:15~11:30

会場:シーモールパレス ダイヤモンドの間

演題:「子どもの生活と『メディア』」

講師:原 陽一郎氏(筑紫女学院大学 准教授)

司会:田中沙織(のあ保育園)

幹事:橋本美佐子(嘉川保育園)

記録:小倉敦子(清和保育園) 吉村佳奈美(勝山保育園)



2. 講演の内容

- ・メディアに接する年齢がだんだん低くなっている。
遊びは子どもの”主食”である！！
“スマートフォンに子守をさせないで！！”
→使用しているアプリは？ You tube. dキッズ、dビデオなどテレビと違い、いつでもどこでも・どこでも見ることができ、おわりがないということが問題である。
- ・大人は子育て技術の不足を補うために利用している。
子育ての知識や情報をスマートフォンから得ることも多々あり。
何が正しいのか判断しづらい。

3. 講演を通して明確になったことや課題(制度・人・地域・事業内容など)

- ・メディアに触れる年齢が低くなっている→メディア依存となる子どもが急増している。

(例) 1歳半の子ども テレビを消すと大泣きするなど

- ・ スマートフォンで子育て知識や情報を得ている

少子化により、子どもに子育て支援の姿に出会うことが減ってきている。

子どもに接する気化器が少なくなっている 70~80代の方が子どもの声を騒音と言っている。

- ・ 親子の関係性の劣化

愛着形成不全が問題となっている。

(例) 授乳の仕方 昔：授乳中に飲むのを止める→子どもから大人への働きかけ

今：授乳中にテレビ、スマートフォン→子どもが無視されている

4. 子育て支援拠点事業の新しい展開に向けての方策や具体的プラン、講師からの提言等

- ・ “遊び”にはモデルが必要である。

大人が遊ぶのが下手になってきている

経験が少なくなってきた

- ・ 保育士が子ども達との関係を丁寧に作っていくことが必要である。

非現実的なものになりたい子どもは人に見て欲しい、認めて欲しいと考えている。

→マンガの主人公やアニメ

子育て文化の劣化は保護者だけに起こっているのではない！！

ちひろコンサート 27日 11:45~12:30 市民会館中ホール



子育て屋台村&交流タイム

1. セッション：子育て屋台村・交流タイム

報告書進行 / 西山 忍
伊藤晴美

記録 / 大平 由美子
平林 尚代

会場 / 市民館1Fロビー

時間 / 11:45～12:30

2. 内容

子育てが楽しくなるための、説明書や具体的媒体などを16のブースを設置し屋台村として設営。実演キット販売なども行う。各ブースに分かりやすい説明書のコピーを置き、自由に持ち帰りできるようにする。この企画を通じ、支援者同士のアイデアなどの情報交換が行われた。

屋台村16ブースのテーマと内容

- ① 「布おむつの逆襲」と題し うんち・しっこ→不快→泣く→おむつ交換→気持ちいい→嬉しい のリズムはお母さんとのコミュニケーションとして布おむつの良さを紹介、販売も行う。
- ② 「ねんねこ時計・ねんねこすごろく」と題し 子どもの基本的な生活習慣、決まった時間に寝ることの重要性を伝える。子どもに伝わりやすく説明できるようイラストの時計・すごろくのパネルキットの販売も行う。
- ③ 「シング・スタート」と題し(うたカードの活用)赤ちゃんにとっての最初の文化活動は歌うことと伝えうたカードの活用をすすめる。
- ④ 「ママとわたしのクッキング」と題し短時間レシピを紹介。誰にでも作れるメニューで楽しくできる食育を伝える。
- ⑤ 「手作りおもちゃであったか子育て」と題し手作りおもちゃの展示と作り方紹介。手作りの良さや期待できる効果も伝える。支援者や保護者に好評のおもちゃの手作りキットを販売する。
- ⑥ 「作って守ろう！ ママ目線での防災術」と題し災害時に困難を乗り越えるための、知恵と工夫を紹介する。
身近にある新聞紙やスーパーの袋で作ったスリッパなども展示する。
- ⑦ 「さ〜ゆ〜レディー」と題し乳児に白湯を与える効果と作り方飲ませ方の説明。昔ながらの簡単にできる白湯を乳児に与えることを提案する。
- ⑧ 「子どもとメディア」と題し日本小児科医会がメディアの子どもに及ぼす影響を提言し、そのポスターを掲示する。
- ⑨ 「ママカアップ(手作りグッズ)」と題し 母親が提供し講師にもなれ、活躍の場を提供することを広める。手ぬぐいで作る子どもの帽子などのキット販売も行う。
- ⑩ 「子育て最強グッズ〜おんぶもっこ〜」と題し熊本・天草地方に伝わるおんぶでおんぶの良さを説明。親にも子にもメリットが多いと紹介しすすめる。販売も行う。
- ⑪ 「わらべうたのすすめ」と題し親子で一緒に遊べるわらべうたを紹介しすすめる。お手玉、指人形のキット販売も行う。
- ⑫ 「お箸の達人」と題し指導のタイミングとコツを簡単に楽しく紹介する。
- ⑬ 「秋の遊び THE SAITAMA」と題しお腹がすくのはなぜ？と始まり外で遊ぶのが楽しい季節と

提案、自然の中で遊ぶ楽しさと素晴らしさを推進する。けん玉の実演も行う。

- ⑭ 「♪これくらいのおべんとうばこに♪」と題し子どもの成長にあったお弁当の理想的な素材や内容を
- ⑮ 分かりやすくパネルで説明し伝える。おべんとうの中身のフェルトおもちゃのキットを販売する。
- ⑯ ⑮100年以上前から子育てに使われていたスーパー育児アイテム『絵本』の魅力を伝えおすすめの本も紹介。
- ⑰ 「親子をつなぐポートフォリオ」に基づいて、子どもの姿をポジティブなものとしてとらえることを、親に伝えることを実践したことと効果を伝える。
- ⑱ ⑯「口腔育成～歯科の役割、保育の役割～口腔育成の大切さを理由を説明する。
- ⑲ 液体ミルクの紹介メリットとデメリットについてアメリカの現状を報告する。

3 講演を通して明確になった事や課題

各ブースで行われたことは、支援者と一部の意識の高い保護者には良いこと、子育てにメリットがあるものと明確にされ、伝わり実践されている。まだ伝わらない認知されていない親子に伝える際、「やらなくてはいけない」から「面白そう」「してみよう」「やりたい」「やってよかった」「みんなに教えてあげよう」に変えていく事が大切としそれを課題とする。同時にこれらを苦手とする親を否定するものではないと伝えていく。

4 子育て支援事業の新しい展開に向けての方策や具体的なプラン、講師からの提言等

支援者も利用者も得意な人もそうでない人も、出来ることを見つけ楽しむこと。

良きことは手段を変えたりしながら継続していく。







特別講演：「子育て支援と新しくて旧いまちづくり」

1. セッション: 記念講演

日時：平成29年10月27日（金）13:50～15:30

会場：市民会館 大ホール

演題：「子育て支援と新しくて旧いまちづくり」

講師：汐見稔幸氏 白梅学園大学学長・東京大学名誉教授



2. 講演の内容

○保育園も幼稚園も子どもを教育し…という文面に変えた

↓

保育所も教育するようになる

小学校のカリキュラムをよく知っておく

日本の教の一貫を保育所は担う

21世紀に生きる力→教育しかない

○非認知能力

とにかく子どもの思いに応じてあげること。

待たしたとしても必ず応えてあげること。 頭ごなしに叱らないこと！

↓

それがどれだけ子どもの財産になるか 「三つ子の魂百まで」

愛されている実感 ちゃんと待てる子になる

自分を大事にされている 人は信頼できる 対人関係がうまくなる

↓

そういう愛され方

大好きなものを大事にしてくれた → 学力へつながる

『僕はやればできる』という非認知能力を伸ばす

保護者支援から子育て支援へ

- ・ 子育て支援が混乱した理由
- ・ エンゼルプランから しかし定義がなかった
- ・ メニューのみで混乱。 親をダメにする施策だ！！
- ・ その後の諸実践

○どうして子育てが困難になったのか？

- ・ 文明の方向 都市化 ネット化 情報化 モーターレーゼーション 電化

↓

子どもの居場所をなくした

昔…家の前 空き地 河原で遊んでいた。

大人にとっては便利、快適、楽である

子どもにとっては遊ぶ場所が減ってきている

○何が弱まったのか

1. 体の育ち
2. 感性で判断する力
3. 具体的に思考する力
4. 人と関わる力、支え合う力

○子育てにはこうした問題点が全て出てくる

- ・ 一人ではできない営みなのに…全て母親の責任に
- ・ 放棄して育てる事ができなくなって 全て個別の親が



閉会式

15:30~16:00

下関市民会館大ホール



開会の辞

山口県子育て支援センター連絡会

副会長 桂 信一 氏



主催者あいさつ

日本子ども子育て支援センター連絡

協議会 副会長 川副孝夫氏



大会決議

「乳幼児のメディア機器使用に対する注意掲載について」

日本子ども子育て支援センター連絡

協議会 副会長 小岱柴明氏



大会宣言
山口県子育て支援センター連絡会
副会長 桑原京子 氏



次期開催県 埼玉県アピール
川島快友氏

埼玉県のメンバー

来年は埼玉県川越で待っています！



記念講演：「子どもの世界 大人の世界」

1. セッション:記念講演

日時：平成 29 年 10 月 27 日（金） 16：00～17：30

会場：市民会館 大ホール

演題：「子どもの世界 大人の世界」

講師：カンサンジュン氏



2. 講演の内容

『リアルな子育て』

○リアルな子どもの体

東日本大震災映像だけでは伝わらない現地に行って一番違うのは「臭い」津波に流されている人の映像を流さない。リアルなものから遠ざける風潮どんな大きな事件や災害も10年経てば無かった事になる。

長野の信州大学付属1年から6年のクラス

動物をあえて飼っている それは動物の「死」を通して命を感じる

○身体の実アリティ

自分の顔は見えない。鏡に映った自分の顔しか見ていない。

人は、身体の実界を越えればおかしくなる

自分に身体の実アリティがない人は他人の実アリティはない。

○共感、同感

人間の實界を越えるを「悪」

実アリティが

身体的感覺

寺田寅彦氏の「復元力」

気仙沼の園長の言葉

らず迷いそうでした。案内の方が配置されていると良かったと思います。渡したい以外でもたくさんおられました。(1日目終了後説明があれば良かったです…)

- 2日間お疲れ様でした。
- とても現在のわたしにとって指針となるお話をお伺いできありがたかったです。学び続ける必要を感じました。
- 2日目 市民会館に来たが受付は会場にだれもおらずいかなものかと思った。



皆様からの熊本地震災害への真心からの募金 15,666 円は熊本へお届けしました。



みなさん、
本当にありがとうございました！
次回は埼玉県でお会いしましょう～

大会決議

「乳幼児のメディア機器使用に対する注意掲載について」

第8回子ども・子育て支援全国研究大会にあたり、つぎのことを決議します。

乳幼児の使用が想定されるスマホ・タブレット・ゲームなどのメディア機器・サービスにおいて、不適切な使用による健康・発達への被害を未然に防ぐために、例文のような注意喚起文をメディア機器の説明書ないし利用の手引き、製品本体などに消費者に判りやすいように明記することを強く要望します。

●注意喚起文例

『本製品の乳幼児の使用には健康・発達への影響の懸念があります』

『本製品を乳幼児が使用した場合の健康・発達に対する安全性は保証されていません』

※タバコの害においては科学的証明がなされる前から注意喚起文が表示され、根拠が明らかになるにつれてその文面が変わってきたという経緯があります。この例文はその前例に則っています。

【決議の理由】

近年の高度情報化社会に向けての基盤整備や関連機器の技術的進歩には目を見張るものがあります。それらは人類の幸福と繁栄に大いに寄与するとともに人々の生活に大きな変化をもたらすものとなりつつあります。一方、これらの技術的な進歩を望ましいこととして肯定しながらも、それらがもたらすかもしれない未知の影響については慎重な検討が必要であろうと思われます。メディア機器・サービスについて、成人の場合には個人の自己責任において使用されますが、責任能力の無い乳幼児期の子どもにおいては、保護者の責任の下に使用されることとなります。

現時点で「乳幼児のメディア機器・サービスの使用が健康や発達に全く悪影響を与えていない、あるいは安全である」ということを証明する科学的研究成果はありません。一方で、子育て支援・保育・小児医療の現場では、乳幼児のメディア機器・サービスの使用による健康・発達への悪影響とみられる事例が多数発生しています。しかし、保護者は、このような悪影響が懸念される状況であることを示されないまま、乳幼児に使用させているのです。

私たち乳幼児の健全な発育に関わるものとしては、心身ともに成長発達の途上にある乳幼児期の子どもたちの健康・発達への影響については、特に慎重な検討が必要であり、それは社会的な責務であると考えています。

平成 29 年 10 月 27 日

第 8 回子ども・子育て支援全国研究大会 2017 参加者一同

《私達も賛同します。》

日本子ども・子育て支援センター連絡協議会

NPO 法人 子どもとメディア

柏市立認可保育園協議会

熊本県地域子育て支援センター事業連絡協議会

ぐんま子育て支援センター連絡会

子育てセンター実践研究会

子どもとメディア北海道

子どもとメディア関東

子どもとメディアみやぎ

埼玉ここネット

島根県小児科医会メディア対策委員

下関市小児科医会

玉名市私立保育園協会

千葉県子育て支援事業担当者会議

チャイルドラインしものせき

富山県子育て支援センター連絡協議会

宮崎県子育て支援連絡協議会

山口県子育て支援センター連絡会

山梨県保育協議会地域子育て支援部会

(平成 29 年 10 月 27 日現在までに賛同されている団体個人名です。: 50 音順)

大会宣言

来年度より新・保育所保育指針のもとでの保育が始まります。その指針には「子育て支援」が草立てされ、ますます保育や子育て支援に対する期待が高まっています。

一方で保育所や地域が子育て支援を担って三十年近く経つにも関わらず、児童虐待や子どもの貧困など、社会的養護を必要とする家庭や気になる子どもは増え続けています。私たちは、この現状を憂い4年前に全国組織を立ち上げました。そして毎年の研究大会では「保護者支援・親支援」以上に「子どもの育ち・子育て支援」に焦点をあてた研修を重ねてきました。

本研究大会では、日常保育の何気ない業務の中に「子育て支援の芽」があり、保育士や保護者にどう意識化、言語化できるのかを探りました。また保育所や子育て支援拠点が核となって地域を紡ぐ「保育コミュニティー」の邑づくりに新しい「子育て支援」の展開の可能性を見だし、合わせて昨年四月の熊本・大分地震の教訓から保育・子育て支援の活動中での災害対策も学びました。

会場となった下関市民会館では、初の試みとして「子育て屋台村」が開店、山口県発・全国発のもりだくさんの子育て支援情報のお土産ができ、さらに会場のそこあそこで姉妹園・兄弟センターづくりの会話が弾むなど、とても有意義な大会になったと確信致します。

私たちは、ここ歴史回天の地・山口において二日間にわたり学んだ子ども・子育て支援のあり方を明日からの活動に活かしていくことを誓い大会宣言とします。

平成二十九年十月二十七日

第八回 子ども子育て支援全国研究大会